



2012年6月13日放送

漢方頻用処方解説 六君子湯①

千葉大学大学院 医学研究院 和漢診療学講座 並木 隆雄

本日は、六君子湯についてご紹介します。この処方名の読み方は数字の六を「リク」と読ませて、リックンシトウと読みます。

1 主な効能

体力中等度以下の方で、胃腸が弱く、食欲がなく、みぞおちが痞え、疲れやすく、貧血性で手足が冷えやすいなどの症状を改善します。病名や症候では、胃炎、胃腸虚弱、胃下垂、消化不良、胃痛、嘔吐などを改善します。

さらに消化器症状の改善により、食欲不振が改善するため、疲れやすいとか、手足が冷えるなどの全身症状を改善させることにもなります。そういう意味で、六君子湯は漢方的には気虚を改善する補剤とも考えています。

2 処方の出典、処方名の由来

出典は今まで明代の『万病回春』と考えられていましたが、最近の研究では、元の時代、1337年に書かれた『世医得効方』脾胃門ではないかと言われています。その中に「四君子湯は胃腸の調子がすぐれず、食欲がない人を治療する。陳皮と半夏を加えて六君子湯と命名する」と書かれています。また、後の明代、1515年発刊『医学正伝』には「水滯と気虚の病態があり、からえずきを発するものを治す」とも書かれています。

いずれにせよ、消化器症状に用いる処方です。気虚と水滯の病態に使用するの、現代

でも同様です。今回ご説明する六君子湯は四君子湯と二陳湯と二つの処方を合わせたとも考えられます。そこでこの二つの処方について簡単にご説明しておきます。

まず四君子湯は『和剤局方』（一切気門という節）に掲載されている処方です。「身体内部を養う榮気と、外部を守る衛気とが共に虚し、五臓六腑が虚弱で、上部の胃の付近が張って苦しく、全く食欲がなく、腸が鳴り、下痢をし、嘔吐やしゃっくりが出るような人に用いるとよい。常用すると胃腸の機能を整え、食欲を増して、外からの邪気の侵入を防ぐ効能がある」と書かれています。

四君子湯は「気虚」、つまり気の量の不足を改善する基本処方です。四君子湯は六君子湯より胃腸機能が低下し、体力が弱った方に用います。

一方、二陳湯は水滯、すなわち体内の水分代謝の異常状態を治療する基本処方です。この二陳湯も『和剤局方』（痰飲門という節）に掲載されている処方です。「痰飲のため、嘔吐悪心、めまい、心悸亢進、胃部の不快感、発熱などの症状の見られる場合、あるいは生や冷えたものを食べたことにより胃腸の調和が障害されている状態を治療する」と水滯の病態への有用性が書かれています。

次に処方名の由来です。後で述べますが、（大棗と生姜を除く）主要な生薬が6つであることから由来すると言われています。もう一つの説としては、先ほど出てきた四君子湯と二陳湯の2つの処方の名前についている数を足したから六になったという説もあります。君子のようにマイルドな薬という意味があると言われています。

3 薬能

さて、生薬構成の漢方的解説（薬能）を致します。構成生薬は人参、朮（蒼朮または白朮）、茯苓、半夏、陳皮、大棗、甘草、生姜の8種類です。つまり現在の一般的なエキス製剤では、六君子湯の構成生薬数は6種類ではなく、それより2種類多い、8種類の生薬構成になります。この理由は大棗と生姜を古の人々は味付け程度に考えていたため重要な生薬と数えなかったからとも言われています。しかし、現代ではこの2つも当然構成生薬と考えていますので、これらを含めた漢方的な生薬の解説を致します。

人参ですが、これはご存知のように朝鮮人参です。朝鮮人参は『神農本草経』では長く使用しても害が少なく生命を養うと考えられた「上品」の生薬に入れられています。消化吸収機能を改善し、体力の低下や免疫の腑活作用などがあります。漢方的には補気や水の増加（生津）、安神などの作用があります。茯苓、半夏、陳皮、朮、生姜はいわゆる水滯に用いられ、水分代謝調節をします。さらに半夏、陳皮、大棗、甘草は胃の調子を整え調和させると理解されています。

先ほどご説明しました四君子湯は、六君子湯から半夏、陳皮を除いた構成になっています。構成生薬数はやはり4種類ではなくそれより2種類多い、6種類の構成生薬になっています。この理由は大君子湯と同じです。

二陳湯は半夏、陳皮、茯苓、生姜、大棗、甘草の五味からなり、半夏、陳皮、茯苓、生姜が水滯を調節します。大棗、甘草が味を調え胃の調子を調和させる作用があると言われ

ます。二陳湯が水滯を改善させる効果を裏付ける生薬構成です。

4 古医書における記載

中国の明代 1587 年に書かれた『万病回春』の中の補益門では、次のようなものに使うと紹介されています。「胃腸が虚弱で食欲が低下したりするもの、長期間に発熱性の下痢が続いたり、熱感を覚えるもの。消化が不十分で胃酸の逆流があるもの」などに用いることが書かれ、現在の使用法に近い記載がなされています。

日本では安土桃山時代に活躍した曲直瀬道三の『衆方規矩』には、「六君子湯は胃腸の調子が悪く食欲が出ないもので水滯傾向のあるものを治す。また気虚があり水滯が合併して吐気を催すものにもよい」とも書かれています。折衷派の和田東郭では、六君子湯は「四君子湯に陳皮、半夏が加わっているので、水分の停滞を押し開く力がより強い」と考えていたようです。

津田玄仙では「六君子湯を構成する生薬のうち、四君子湯は元気を補う補剤の処方である。また、六君子湯の中には二陳湯がそのままこめられている。したがって、六君子湯は元気虚弱で水滯のある症に用いる正面の処方である」と解説しています。

百々漢陰（『漢陰臆乗』）は、「結局は（六君子湯は）脾胃虚弱、水滯を治す。大病をして死が近くなった人に、真武湯や四逆湯などの処方を用いるのは適切と思われるかもしれないが、病人が極めて虚している時は、附子の薬効に耐えることができず、かえって苦しめてしまうことがよくある。そのような時に六君子湯を与えれば、元気も引き立って楽になるものである」と書いています。真武湯や四逆湯などの附子剤と六君子湯などの補気剤の使用法の違いを述べています。

江戸末期から明治初期の名医、浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』には、「六君子湯は人参湯の変方で、中気をたすけ胃を開く効がある。したがって、老人が脾胃虚弱で水滯（痰）があり食欲のないもの、あるいは大病の後、脾胃が虚して食欲がなく味がわからないものに用いる」と書いてあります。

5 古医書にみる症例

症例についてもお話しします。

津田玄仙（『療治経験筆記』）は「ある人が、胸が痞えて力がなく、嘔吐して痰やよだれをすべて吐いてしまい、少し手足がだるくなった。100 日間ほど無治療で、私の治療を求めてきた。そこで六君子湯に枳実を加えて与えると、30 余日で全快した。手足の倦怠は胃腸（脾胃）の虚弱であり、四君子湯の症である。胸が堅く痞えるのは枳実の症であり、時に嘔して痰を吐くのは水滯（湿痰の逆）であるので、これは二陳湯の症である。そこで六君子湯に枳実を加えた処方を出したのである」という症例があります。

浅田宗伯（『橘窓書影』）は「ある婦人が吐き下した後、数日嘔気が止まらず、飲食物が喉を通らない状態でした。少し咳したり、唾を吐いたりしました。診察では腹部は腹直筋が張って、脈は沈微でした。ただ冷水を欲しがらただけで瀕死の状態であったため、医師は

皆、治療を断って去ってしまった。

私は胃気不和、津液流通不能の証と診て、六君子湯加芍薬、五味子を少量ずつ冷服させました。薬汁が初めて納まり、そのまま 1 日を無事に経過した。そこで米飯を冷まして食べさせたところ、10 日ばかり絶食の後にもかかわらず、食事や内服ともに進んで、諸症がしだいに改善し危機を脱した」という症例報告を残しています。点滴のない時代でしたから、食べられなくなった途端に瀕死になったわけで、それを回復させたというのは、名医浅田宗伯に恥じない症例です。